

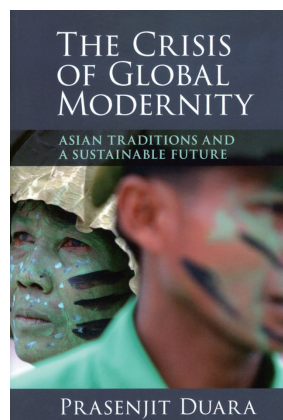
プラセンジット・ドウアラ

『グローバル近代の危機——アジアの伝統と持続可能な未来』

Prasenjit Duara, *The Crisis of Global Modernity:*

Asian Traditions and a Sustainable Future.

鍾以江・磯前順一



Cambridge University Press, 2015

ここでレビューされる『グローバル近代の危機』の著者、アメリカのデューク大学教授のプラセンジット・ドウアラは世界的に著名な学者である。しかし、数多あるドウアラの著作はいまだ一冊も日本語に翻訳されておらず、日本での知名度は決して十分とはいえない。それは、日本における研究者が日本の地域研究を超えて活動する学者に対していなく関心が薄いことに起因しているようにも思われる。

以下、最初にドウアラを個人史的に紹介し、次に国際的に広い反響を呼んでいるこの本を同氏の研究史の中に位置づけ紹介する。そして最後に、本の中心的な概念の一つである「対話的超越性」(dialogic transcendence)をポストコロナ的分析視点としての「主体化」と関連付けながら分析することにした。

著者の紹介

ドウアラは一九五〇年にインドのアッサム州に生まれ、名門のデリー大学で歴史を勉強するが、一九六〇年代と七〇年代の中国の文化大革命に鼓舞されインドの学生運動に参加した。その背景には、インドの脱植民地の成功を期待した世代が、独立後、農村の近代化の失敗に対していた失望感があつたのだ。インドに伝わってきた文化大革命のユートピア的な可能性、なかなかそこで描かれた中国の農村革命の成功像が、氏の関心を中国農村に導いた。

その関心を持って、ドウアラは一九七六年からアメリカのシカゴ大学とハーバード大学の大学院で中国史を勉強し、一九八三年

に日本軍占領期の中国北部農村の歴史をテーマにした博士論文を持ってハーバード大学で博士号を取った。その後、いくつかの大学を経て、一九九〇年からシカゴ大学で教鞭をとることとなった。氏の博士論文は、一九八八年に『文化、パワーと国家——一九〇〇〜四二年における華北の農村』(*Culture, Power, and the State: Rural North China, 1900-1942*, Stanford University Press, 1988)のタイトルで出版された。出版後すぐ大きい反響を呼び、翌年アメリカ歴史研究学会のジョン・K・フェアバンク賞とアジア研究学会のジョーセフ・レヴェンセン賞を受賞した。華北農村の前近代的な宗教生活と資源採取の様式が、いかに近代化の衝撃で変化あるいは消失したかを考究したもので、ドゥアラはこの本によって中国史のなかの宗教とりわけ民間宗教の重要性を認識するようになった。

この民間宗教への関心は、ドゥアラの二冊目の著作で、近代国民国家批判の書『ネイションから歴史を救う——近代中国のナラティブを問う』(*Rescuing History from the Nation: Questioning Narratives of Modern China*, University of Chicago Press, 1995)において、ネイションの「他者」と「余白」として、言い換えればネイション批判の方法として、大きな部分を占めることになる。前近代の地域生活あるいは公共空間の基盤となっていた民間宗教は、近代化のために「世俗主義」、「宗教」、「迷信」などの近代カテゴリーによって再改編されたが、完全に近代的なネイションの空間に吸収されること

はなかったことが指摘される。

そのあと、ドゥアラの宗教に対する関心は超越性に移っていく。二〇〇三年に出版した『主権と真正性——満州国と東アジアの近代』(*Sovereignty and Authenticity: Manchukuo and the East Asian Modern*, Rowman & Littlefield, 2003)は、中国の民間宗教結社の普遍的な理想と実践のなかの超越性がいかに近代国民的な共同体と市民のビジョンを突きつけ、抗争しあつて、いかにその抗争によって近代的な「人間」が形成されてきたかをめぐる研究であつた。中でも、満州国が主権国家という体裁を整えた上で、実際には日本帝国の植民地として機能した指摘は、アメリカの戦後の東アジア政策を決定付けるような、新しい形態の植民地支配として、ピーター・ドゥースの「植民地なき帝国主義」という主張と呼応しあつて大きな注目を浴びた。

二〇〇八年にドゥアラは十八年間務めたシカゴ大学を出て、シンガポール国立大学のアジア研究所(Asia Research Institute)の所長に着任した。そして二〇一五年にアメリカのデューク大学に移るまで、アジアで有数の人文系研究所をリードしながら、『グローバル近代の危機——アジアの伝統と持続可能な未来』を完成させ、同年に出版した。ノルウェーのオスロ大学はこの本によるドゥアラ氏の研究が今日の環境問題の研究へ多く貢献していることを認め、二〇一七年にドゥアラ氏に名誉博士号を授与したのである。

ここでドゥアラとポストコロニアル研究の関係を説明しておこう。大学の時のドゥアラは同じ世代のインドの学者と同様、六〇年代のポスト構造主義とカルチュラル・スタディーズに強く影響された。その学者たちの中には、ずっと農村に関心を持ち続けた者がいて、彼らの研究関心が、ポストコロニアル研究の先駆者であるエドワード・サイード（元コロンビア大学教授）の『オリエンタリズム』（一九七二年）に刺激されることで、後に「サバルタン・スタディーズ」のメンバーとして知られるインド系研究者たちを生み出していった。その代表的な学者が、インド、コルカタ出身でアメリカのコロンビア大学の教授であるパルタ・チャタジー（Parna Chatterjee）であった。

マルクス主義はインドを矛盾的な状況から救い出せないこと、独立したインドはいまだ元宗主国の植民地主義者たちと同じ国民国家単位での資本主義のゲームに駆り立てられ負け続けていることを認識したサバルタン・スタディーズのメンバーたちは、のちに学術世界を席卷するポストコロニアル研究の先駆者であったといえよう。一九八六年に出版されたチャタジーの著書『ナシヨナリスト思想と植民地世界——派生的言説にすぎないのか』（*Nationalist Thought and the Colonial World: A Derivative Discourse?* Zed Books, 1986）は、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』（一九八三年）に対するサバルタン・スタディーズからの批判の書であった。

しかし、ドゥアラは、サバルタン・スタディーズが行っていた、ブルジョア的なナシヨナリズムへの批判より、ナシヨナリズム自体を研究対象に据えるべきだと考えるようになる。それだけでなく、サバルタン・スタディーズが有する、言語に対する脱構築的な、ポストモダンのな、コミットメントを否定するように見える批判性と、脱植民地と解放へのコミットメントとの間の緊張関係に着目するようになる。その影響を受けて、一九九五年に出版された『ネイションから歴史を救う』は、その緊張関係のバランスを保ちながら、実証的な歴史としてのナシヨナリズムに対して脱構築的な言説分析を行い、中国近代史を国民国家に吸収されない視点を提供する批判的な研究となったのである。ほぼ同じ時期に、ドゥアラの出身地のアッサム州と隣接するベンガル地方出身のガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Spivak、コロンビア大学教授）は「サバルタン・スタディーズは脱構築可能か」という論文で、やはりラナジット・グハラのサバルタン・スタディーズを批判的に読み替えたが、彼女を一躍有名にした論文「サバルタンは語ることができるか」（一九八八年）につながるような、代理表象のポリテイクスへの脱構築的介入とは異なる、実証的な歴史学の手法を用いたのである。

西洋発端の近代知に対する批判的視点から国民国家と近代性を批判し続けてきたという意味で、ドゥアラもまたポストコロニア

ル研究者だと理解できる。ポストコロニアル御三家といえ、先のサイドに加え、現在、ガヤトリ・スピヴァクと、ペルシア系インド人のホミ・バーバ (Homi Bhabha、ハーバード大学教授) の三人が並び称せられてきたが、彼らはいずれも英語圏の大学で学位を習得し、研究経歴を積み上げてきた共通点を有する。その点ではドゥアラも同様であり、そうした経歴自体が西洋と非西洋の入り混じった植民地主義の時代以降の「異種混濁的な生と知」を体現する存在である。

ただし、彼は「ポストコロニアル」とは一つの理論 (theory) ではなく、一つの視点 (perspective) であり、またその視点はヨーロッパの啓蒙理性に基づいた近代的な視点の外からの、想像力に富んだ視点であると、従来のポストコロニアル批評に対しては留保を置いたポストコロニアル研究の立場を取る。このポストコロニアルの定義は、同じインド出身の研究者でもスピヴァクやバーバとはかなり差があるように思われる。

一般にポストコロニアル研究といえば、ジャック・デリダやミシェル・フーコーなどのポスト構造主義——構造の実体化を批判する立場——を方法論に据えたうえで、非決定的な主体が個別の歴史状況の中に分節化 (articulation) されていくなかで生じる搾取や排除を問題化するアプローチを指す。先述のポストコロニアル御三家がいずれも英語文学批評家 (English critic) であり、デリダ

を批判するサイドにしても、旧宗主国の英語文学テキストのコンテーションを転覆させたり横領したりする戦略を取る点で共通する。

それが、ドゥアラが距離を置くポストコロニアル批評の典型的な「理論」なわけだが、政治史を主舞台とするドゥアラはこうした主体やアイデンティティの脱構築的な効果よりも、社会状況や構造の分析に主眼を置いたのである。その社会構造自体が、ポストコロニアル状況に他ならない事実、すなわち政治的に独立したあとも、政治的な影響を含めて、経済的にも文化的にも植民地化の歴史から解放たれることはないという現実を、彼は「ポストコロニアル状況 (postcolonial condition)」と名づけたのである。「ポスト」とは時代的な区切りのついた「後」という意味ではなく、依然として影響が続く、先行する植民地期がまだ持続する空間の「内部で」という意味なのだ。その状況に介入するためには、脱構築的なテキストの意味の転覆とは異なる多様な方法があることを、文学者ではなく歴史学者であるドゥアラは「視点」と呼んだのである。

こうしたポストコロニアル研究の散種 (dissemination) は、中国史研究のドゥアラのみならず、日本研究の酒井直樹、韓国研究の尹海東や金哲ユンヘドン キムテヨル、キリスト教研究のタラル・アサド、インド研究のゴウリ・ヴィシュワナータンなど、御三家以外の研究者によつて

広く推し進められてきたところである。そして、スピヴァク自身もまた、ポストコロニアル研究はインド系の英文学／英語文学研究の方法に限定されるべきものではなく、各地域の植民地経験に沿って、その固有の特質の方法と主題にもとに発展させられていくべきだと述べている。いずれも、俗流のポストコロニアリストのように単なる差異の称賛に終わるのではなく、差異を梃子とした主体と公共空間そのものの再編を目的とする点では、共通点を有する第二世代に属するといえる。

こうした先行研究に敬意を払いつつも、距離をおいたその柔軟な姿勢から、ドゥアラはやがて近現代資本主義とナショナリズムへの最も重要な批判は自然の破壊であるという、彼ならではの主題を発見するにいたる。その思考の成果が、以下に概要を紹介する本書『グローバル近代の危機』なのである。

『グローバル近代の危機』

ドゥアラは、今日の世界状況が三つの相互交差の特徴を持っていると考える。それは、1、非西洋世界の上昇、2、自然環境の持続不可能の危機と、3、権力源泉としての超越性の喪失である。超越性 (transcendence) はかつての宗教や政治イデオロギーが持っていた理念、原則、倫理の源泉ということを指している。今日の世界の物理的な救いは今の時代の超越的な目的になるべきだが、

そのためまず国民主権を超越しないといけない。彼はアジアの伝統が人間、生態、普遍との関係に対する、西洋と違う理解の仕方を持つていて、そこに実現可能な持続可能な世界のための基礎になるものを見つけることが可能だと説く。その可能性への歴史的・理論的探索がこの本の目的である。

この本は、序章、本文の七章とエピローグからなる。第一章「サステナビリティと超越性の危機」はグローバル近代の危機とは何かを説明し、普遍的なビジョンの問題とそれへの探求、アジア社会におけるその探求の事例を紹介する。アジア、特に中国の上昇とともにアジアの学者が、近代的な普遍主義よりもつと公正な世界像の構築に値する超越的な知的資源を土着の伝統から探し出そうとしている。本章はこの「ポスト西洋の近代」(post-Western modernity)における超越性の可能性を理解する必要があると説く。

第二章「循環的歴史と競争的歴史」は、国民国家単位の近代化記述の中心概念「主権」(sovereignty)を批判するため、「循環的歴史」概念を導入する。前近代の歴史記述は、普遍的あるいは宇宙論的な時間との関係性を持ちながら差異と論争を包摂したが、近代になり競争的排他的な国民国家の直線的 (linear) な歴史記述が主流になった。このような直線的な記述は、前近代社会を可能にしたコスモポリタンの循環性を隠蔽してしまう。

第三章「グローバル近代の歴史的ロジック」は、サステナビリ

テイの危機を理解するために、今まで規範的であつた西洋モデルの資本主義を頂点とする近代化理論 (modernization theory) を相対化しつつ、「グローバル近代のロジック」という分析概念を導入する。「ロジック」とは歴史変化のボタンであり、資本、政治システム、文化との三種類がある。資本は一番強いロジックと考えられがちだが、この三種類はそれぞれ独自性を持つ。

脱地域性を持ち、あらゆる境界を越えて市場と資源を探し出すのは資本のロジックで、今日の資本はインターネットを通して国民国家の世界システムを再空間化している。国民国家に埋め込んでいる政治ロジックは、主権と世界的無秩序状態とのテンションによつて表象されている。文化ロジックは、組織化された超越性に基づく「文明」と「ハイカルチャー」、そして気づかれていない循環のグローバルなネットワークの間の動きを指している。冷戦後の資本は国民国家の政治ロジックと文化ロジックを飲み込んでいくように見えるが、公と私のパートナシップ、ソーシャル・メディア、市民社会ネットワークの発達などの新たな社会文化的な動きから、三つのロジックのバランスをとる様式が生まれてくるかもしれないと予測している。

第四章「対話的超越性とラディカルな超越性」では、この本の最も重要な概念の一つ「対話的超越性」(dialogical transcendence) が披露される。ドゥアラは、ユーラシアの超越性の伝統を、絶対的

な一神教の創造神 God の観念に基づいた「極端な超越性 (radical transcendence)」とし、複数性 (plurality) を持つ内在的で、多神的、汎神的な宗教実践と織り交ぜていた対話的超越性とを区別する。対話的超越性では真理の異なったレベルでの分節化の共存が許されていた。その共存は討論と論争、互いの無視、相互的「借用」などの形で実現化されるものである。この章はアジアの対話的超越性の伝統、また各種の個人と身体的修養実践と技法とその哲学的教義面での特徴を紹介し、これらの特徴とサステナビリティの関係を検討する。

第五章「中華文化圏における対話的超越性と世俗的ナショナリズム」は、世俗主義とナショナリズムが制度化される前の中国民間宗教の対話的超越性を考察する。中国史においてはラディカルな超越性による宗教的な衝突はなかったが、対話的超越性の分節化の一つは、国家とエリート階層対民間宗教の競争であつた。この垂直的な区分は、ラディカルな超越性の特徴とするキリスト教をモデルにした世俗化理論では理解できず、見落とされることのほうが多い。

第六章「世俗主義と超越性の往来 (traffic)」は第五章で提起された世俗化の問題を念頭に、「往来」という概念を利用してアジアにおける世俗化の過程を考える。ドゥアラによると、往来には二つの面があり、一つは世俗を作り出す過程で宗教に関する特性と

特徴の循環的な社会的再分配であり、もう一つは近代政治の要素の新たに構成された宗教への移転とのこと。近代アジア史の中では、超越性と宗教の他の要素はただ消失していくではなく、多くは異なった空間と制度に転移したのだ。「往来」概念を利用したアジアの世俗化にたいする考察は、今日の世界で如何に超越性を再想像できるかを考えるために示唆的である。

第七章「アジアにおける循環地域とサステナビリティのネットワーク」は、グローバリゼーションの中の地域化を考察し、グローバル経済と戦略競争による地域主義 (regionalism) から循環とネットワークの視点で新たな可能性を読み出す。EU、ASEAN、APECなどの地域主義は相互依存を深めるだけではなく、グローバルのコモンズ——生命に不可欠な資源で、いかなる私的な個体・国民によつても独占できないもの——を共同管理する考えをもたらした。ドゥアラ氏は、地域主義が、不安定ながら増強していく国民国家的富のグローバルの源泉と国民国家的問題のグローバルの源泉とを仲介する空間となることを可能性として期待している。